

JR新宿駅の東側には、東西に平行して二本の大きな道路が走っている。南側、JR新宿駅東口と接する形で走るのは新宿通り（国道二十号線）で、新宿御苑大木戸門のあたりで分岐した一本がJRの線路をまたぎ新宿駅南口前を通過して、甲州街道とその名をかえる。分岐した残りの一本は新宿駅の北側でJRの線路にぶつかり、新宿大ガード下を通過するもう一本の広い道路、靖国通りと合流する。

このふたつの道路にはさまれて、新宿一丁目から二丁目、荒木町、四谷四丁目などの町が存在する。靖国通りの北側には歌舞伎町一丁目、二丁目、新宿五丁目から七丁目、富久町などがある。新宿三丁目はJRの線路と靖国通り、そして南北に走る明治通りによって三辺を囲まれた三角地帯である。

これらのうち警視庁新宿警察署の管轄となるのは、新宿三丁目と六丁目、七丁目、歌舞伎町一丁目と二丁目だ。新宿一丁目と二丁目、新宿五丁目などは、四谷警察署の管轄下となる。さらに靖国通りの地下に道路幅に沿ってサブナード地下街があり、西武線新宿駅、そして地下鉄丸ノ内線新宿駅と地下道でつながっている。

サブナード地下街は北西から南東に走る横の二本の通りと丸ノ内線新宿駅につながる縦の通りによって構成されている。北西から南東に走る通りは、上からサブナード一丁目、二丁目、三丁目と区切られ二丁目と三丁目のあいだから縦にのびるブロックがサブナード四丁目だ。

鯨島が足を止めたのは、サブナード三丁目の南東の端近くだった。歌舞伎町一丁目を南北に走る区役所通りに近い入り口から階段を降りてくるアベックに気づいたのだ。男の姿に見覚えがあった。

最後に外で会ったとき、男はダブルのスーツをノーネクタイで着け、全身を刺されて血まみれだった。わき腹の傷は脾臓に達し、病院に収容されるのがあと三十分遅ければ、出血多量で生命を落とすところだった。男はその体で車を運転し、新宿署の玄関に乗りつけると、入口をくぐったところで、

「『新宿鯨』を呼んでくれ」

とだけいって失神したのだ。

所属する暴力団と対立する中国系売春組織の幹部をひとり射殺し、ひとりに重傷を負わせた、その足だった。

男の名は真壁まかべといった。当時は二十五で、その若さでありながら、組の若衆頭りゅうちゆうを凌駕する力量を身につけていた。

男はわずかに足をひきずっていた。化粧化のない驚くほど白い肌をした女が、階段を降り

る男を気づかうようによりそっている。男はだが、その気づかいにいらだっていた。

「大丈夫だ」

肘にそえようとした女の手をふり払い、男が低い声でいうのが聞こえた。まちがいない、と鮫島は思った。その声がひどくかすれていたからだ。

真壁と出会ったのは、それよりさらに一年前のことだ。鮫島は十代から二十代初めの少年で構成されたトルエンの卸しグループを追っていた。グループのひとりが、トルエンの密売をシノギにする組員に刺されて死亡し、リーダー格の少年にも同じ組から追っ手がかかった。鮫島は組より先に少年をおさえる必要を感じた。

少年はトルエンの稼ぎを、自分のバンドにつきこんでいた。少年の恋人と晶が友達で、初めて鮫島が会ったとき、晶はやくざに顔を殴りつけられた直後だった。晶が少年の恋人をかまっていたのだ。

少年は吉祥寺のライブハウスに隠れていた。周辺は、追っ手の藤野組組員によつて固められていて、鮫島は単身そこから少年を連れださなければならなかった。

ライブハウスの前に違法駐車されたメルセデスがあり、藤野組の若頭わかがしらが乗っていた。移動を命じた鮫島を若頭は無視した。鮫島はメルセデスの窓を特殊警棒で叩き割り、とびだしてきた若頭を手錠でメルセデスのドアノブにつなぎとめた。

少年を確保したあと、近づいてきたのが真壁だった、そのときのやりとりを、鮫島ははっ

きりと覚えている。

遠巻きにしたチンピラたちからひとり離れ、近づいてくるといった。

「キイをいただいてこいと、若頭がいつてるんです」

「用はそれだけか」

いった鮫島の目をまっすぐに見返し、真壁は告げた。

「それだけつす。若頭、ワツパつながれたままじゃ、いい恥さらしつすから」

鮫島は名前を訊ね、真壁という名を知った。真壁は「新宿鮫」という渾名あだなも含め、鮫島のことを知っていた。

手錠のキイを渡した鮫島に、真壁はあとで自分が返しに行く、と告げた。知りあいのマル暴の刑事に返せばすむことだった。鮫島がなぜだと訊ねるといった。

「恥をさらすわけにいかないんで」

「恥だと思ってるのか」

「たったひとりに道のまん中でいいように小突き回されたら、他にいいようがないんす」

その言葉を聞いたとき、鮫島は、真壁がただのやくざではない、と感じた。刑事とことをかまえるのを真壁は恐れていなかったのだ。

真壁の名と顔を鮫島は脳裏に刻みつけた。その真壁が今、目の前の階段を降りてこようとしていた。

真壁に打たれた懲役は、決して短くなかった。殺人と殺人未遂。使用した銃は木津きづという密造銃作りの天才が制作したライター型の拳銃だった。

今こうしてしゃばにしていることは、自首した事実と服役態度の評価が釈放を早めたにちがひなかった。しかし真壁が足を洗う筈はずはないと、鮫島は思っていた。真壁の側にその気があっても、真壁ほどの力量を持つ男を組のほうほうがほっておかない。

用心深く最後の段まで下り終えた真壁は初めて目を足もとから正面に向けた。そこに鮫島がいた。

真壁はわずかに目をみひらいた、じつと鮫島を見つめる。

真壁は高価なスーツを着けていた。デザインも決して古いものではない。金に困ってはいない、ということか。

「どいつも」

低い声で真壁がいった。かたわらの女も鮫島の正体に気づいたようだ。無言で鮫島を見つめている。

「その節はお世話になりました」

真壁はいつて、頭をさげた。とうに三十を過ぎている。実際よりさらに老けて見えた。

「いつだ」

鮫島は訊ねた。

「この続きは、書籍でお楽しみください。」

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。